

《翻 訳》

カール・カウツキー「近代の民族集団」^(訳注1)

太 田 仁 樹
(岡山大学名誉教授)

(1)

最近10年の政治的なドイツ語の用語で、「民族的 (national)」のような役割を果たした単語は他にほとんどない。このような影響力をかつて発揮した、そして今も発揮しているものはほとんどない。民族的自由主義者たち (National-liberalen) は、彼らは何故その名前に固執しているのかをよく知っている。だが、厳密に言えば、それは、民族 (Nation) の主権のための戦士、彼らには恐怖の中の恐怖として現れる人民主権 (Volkssouveränität) の戦士に相応しいものなのだ。しかし、アメリカで南部諸州の奴隷所有者を民主主義者 (Demokraten) と呼ぶことができるのなら、何故ドイツのユンカー支配の支持者を民族的自由主義者と呼ぶことができないのだろうか？「自由主義的 (liberal)」という言葉よりも、「民族的」という言葉はずっと魅力的な響きがある。ドイツにおいてだけではない。われわれの隣人は、ドイツのある範囲におけるほどには民族的な誇大妄想が強く発展していないかもしれないとしても、「民族的信条」に関してわれわれと同様であろうと全力を尽くしている。その際、ドイツ民族は他のあらゆる民族よりも遥かに優れていると自慢する者が、ドイツ民族が政治的に無力で未熟で、議会制度の外観のみを承諾しても、ドイツ民族が減ぶに違いないと説明しているのは、滑稽なことである。

「民族的」という言葉で幾多の妄想が覆い隠され、まったく異なった諸要因によって帰結した幾多の政治的結果が民族精神のせいになされたことは確かである。だがわれわれは、このような考慮によって、民族理念 (nationale Idee) が近代文化の諸民族に巨大な影響を及ぼしているという事実を看過することはない。その影響は、単なる人為的企みによって説明しうるものではない。幾多の諸党派がその特別な目的のために民族理念を利用し尽くし、それによってその勢力を強化したことは、否定することができない。だが、われわれが民族理念のルーツをそのような動きに求めようとすれば、社会主義運動は労働者の金銭で自分の懐を肥やそうとする若干の「煽動者」の産物であると考える者と同様の誤りを犯すことになる。民族理念のために、数十万の人々が命を捧げ、測り知れない歳月にわたり闘っただけではない。非常な困難に耐え、迫害と追放に抵抗した。それは、講演と新聞記事によっては引き起こすことのできないような、強靱な犠牲的精神、持続的熱狂を奮い起こした。

民族理念は新聞記者や政治家の人工的産物ではない。むしろそれは自然のものなのだろうか？ ある民族の成員であることは、特定の人種の成員であることと同様に、決定されていることなのだろうか？ 少なからぬわれわれのブルジョア的イデオログは、このような見解を持っている。それがほとんど正当化できないことは、『ノイエ・ツァイト』の4月号でハマー博士^(訳注2)が適切に実証している。実際、その出自が半ばスラヴ人で半ばフランスのユグノーで、「セム系」の血がいくらか混ざった——その血管にそのようなものは一滴も流れていないことを、今日では誰も確実に説明することができないのが——ベルリンの一教授がいて、そのような混血者が、「ロマンス人の仇敵」に対する闘いをケルスキ族のヘルマン^(訳注3)のもとで行っていた「われわれの祖先」について、それは今日までなお持続しているのだと講義をすることほど笑うべきものはない。

民族集団 (Nationalität) が血統に基づくものでないことは、すでに、民族 (Nation) が様々な種族

(Volksstämme)だけでなく様々な人種 (Rasse)の成員から成り立ちうるということからわかる。ハンガリーの民族には、「アーリア人」、「セム人」及びモンゴル人を見出される。明らかにはっきりと誇張されているユダヤ民族集団 (Nationalität) は非常に異なったタイプを示している。黒人の血統さえそこには表されている。多くのユダヤ人の黒人のような頭髪に驚かなかった者がいるだろうか！ 注意、「セム人」は特定の民族 (Nation) でもないし、特定の人種 (Rasse) でもない。そうではなく、文献学者の創作物、その言語がアイヒホルン^(訳注4)の名付けたセム語族に属する、すなわち特定の特徴のあるすべての人々 (Völker) に付く普通名詞である。だが、今ではそのような言語は、非常に異なった血統の人々に受け入れられて、どの人々がセム人と呼ばれる種族 (Stamm) にどれくらい帰属しているかということを断言することは、今日では誰もできない。従って、われわれはセム「人種 (Rasse)」に関してまったく不確かなのである。ユダヤ人の血統関係もまったく明らかではないのである。

血縁関係が人間社会を纏め上げる紐帯であった限り、言葉の今日的意味での「民族 (Nation)」は知られていなかった。諸民族 (Nationen) の代わりに、われわれは諸種族 (Stämme) を見出し、それは更に諸氏族 (Gentes) や諸血族 (Sippen) に分かれる。(エンゲルス『家族・私有財産および国家の起源』を参照。) 種族 (Stamm) と氏族 (Gens) への帰属は当事者の親族関係に関わっているのであって、一定の地区への帰属にはではない。ある種族において農耕が主要な生産様式になり、その結果定住することになると、自ずと種族や氏族への帰属は、当事者の居住地への帰属をも規定した。こうして形成された小さな共同社会 (Gemeinwesen) であるマルク協同体 (Markgenossenschaften)は、もともと血統の共通性および耕す土地の共通性を基礎としていた。

この共同社会は、遊牧的な諸種族および諸氏族と同様、完全に自足して、外的世界から独立していた。共同的土地占有 (der gemeinsame Grundbesitz) および時とともに私的占有 (Privatbesitz) へと移行する庭園と耕地が、必要な食料品である農耕、牧畜、狩猟、漁労の生産物および共同社会内部で個々の家族あるいは特にそれに従事する手工業者が加工する原料である木材、羊毛、毛皮等々を供給した。外的世界からは時折奢侈品を入手するだけだった。

その結果はマルク協同体の完全な排他性であった。稀にのみ、特に圧倒的な危険が迫ったときに、これらの小さな共同社会の多くは共通の事件に対して連合した。危険が去るや否や、連合は解消した。民族的な統一は問題にならず、民族語 (nationale Sprache) もまったく問題外であった。経済的な隔離は、別々の方言、すなわち個々の種族および協同体における特別な言語の保持と育成を助長した。

ドイツの政治家と学者は、ドイツ人の「個人主義」に不平をいうのが好きだ。それは個人を民族 (Nation) の上に置き、(ケルス族の) ヘルマンの時代から今日まで続いているドイツの分裂と不統一を引き起こしていると言われる。だが、民族のこの分裂は、ドイツ人の人種特性 (Rasseneigentumlichkeit) ではない。それは経済的な発展がある限界を超えないどの種族 (Völkerstamm) にも見出されるものである。そしてこの現象は「個人主義」とは何の関係もない。氏族とマルク協同体の団結が強く、原始的な共産主義が強いほど、それは際立っているからである。

小さな共産主義的共同社会が自己充足的で、互いに密接に連結するように強制する物質的などんな利害も存在しない限り、民族 (Nation) は問題とならない。

そのような結合を引き起こす諸要因としては、まず三つを挙げるべきである。一部は単独で、一部は他の一つあるいは二つの要因と共にこの方向に作用する。だが、三つの要因すべてが生産様式の発展の結果である。それらは一方では外敵の優勢であり、他方では自然の優越である。両者が別々ならば、小さな共同社会が成長することはない。最後に、第3の、より正確にいうと、われわれの判断では最も重要な要因として、商品取引と商品生産を挙げるべきである。

ある種族 (Stamm) がなお遊牧的であり、なかんずく漁労や牧畜を営んでいる限り、敵の防衛のため他の種族と一緒に結びつく必要は取るに足らないものであった。種族は、隣人を誘惑できるような大きな富を持たなかった。隣人との間に紛争をもたらすのは、獵場や放牧地の占有、あるいは撃ち殺された仲間の復讐のための抗争というような、関係する両種族以外には滅多に第三者が利害を持つことのない闘争であった。戦闘者は、武装と熟練において、互いにほぼ同等であり、その数においてもあまり異なることはなかった。ある種族が現実には強大な勢力に直面する場合は、土地に縛り付けられていないので、通例それをかわす可能性が残されている。

農耕が発展し優勢な生産様式になると、まったく事態は異なる。農耕協同体 (ackerbauende Genossenschaft) は、森林山地から土壌がより豊かな河岸平野へ移動し、定住し、福祉を増大し、人口が稠密になり、一定の地域で協同体の数が増加した。だが、メダルには暗い面もあった。増大する福祉は、野蛮なままの住居不定の隣人を略奪へと誘惑し、定住農民はそれを避けることができなかった。開けた平地は、森林山地よりも、防御柵が少なかった。野生の遊牧者においては、武装訓練、馬上闘技や海上航行等々はその生産様式の必須の要求であった。彼らにあっては、耕作は女性に任されたままであった。農民の場合には、軍事訓練は生産の中断を意味していた。農民は遊牧者よりもそれに時間を割けなかったので、遊牧者に比べて不利な立場にあった。

だからわれわれは、しばしば若い農耕民 (Bauernvölker) が略奪的な遊牧者の絶え間ない攻撃に曝されているのを見る。フン人、アヴァール人、ハンガリー人によってドイツ人に降りかかったことは、すでに数百年、数千年以前から、同様に中国人、インド人、エジプト人、メソポタミア人に降りかかっていることなのである。

そのような攻撃に強制されて、脅威を受けたマルク協同体は、共通の敵に対して団結し、防衛隊の統一的な召集軍を、共通の指揮に、すなわち連合軍司令官のもとに委ねざるを得なかった。そして、攻撃がしばしば繰り返される場合には、連合は恒常的なものになり、連合軍司令官の権力は平時にも維持された。個々の協同体同士の団結が強くなり、それらの間の交通が盛んになり、それによって個々の小共同社会の方言がより均一になり、共属感情が生じた。偏狭な地方根性に対する民族的感情 (nationales Gefühl)、地方的な方言に対する民族的言語 (nationale Sprache)、協同体的分立主義 (der genossenschaftliche Partikularismus) に対する民族的中央権力 (nationale Zentralgewalt)。われわれが民族集団 (Nationalität) と呼ぶものの萌芽がこれによって生ずる。

多くの種族においては、既述の第二の要素である自然の優勢に対する共同の闘いが、より強力に作用する。

農民的種族が、森林山地から河岸平野に降りてきて、そこに定住すると、水と河川に依存するようになる。これらは、外見上まったく任意に、天恵あるいは破滅を与える神となる。今日、洪水が農民のすべての希望を無に帰すこともあれば、数ヶ月の後には、旱魃が野原を焼き焦がすこともあった。困窮のなかで人は祈りに逃げ込んだが、ついに経験はより合理的な手段を教えた。旱魃と洪水の循環にある規則性を見出し、これらが星座の何らかの配置と関連を持つということを発見した。だが、人は水利工事によって水位を調整することも学んだ。しかし、そのような調整は河岸住民との計画的で協調的な協働を必要とする。外敵との闘いと同様、河川に対する闘いも、個々のマルク協同体同士の結合を生み出す。共同体からの労働力のどのような召集軍も、共通の指揮、中央権力の命令のもとに置かれる。このようにしても、民族的共同体 (nationale Gemeinschaft) の萌芽が目指された。

ヨーロッパでは文化の始まりは、オリエントのように巨大な大河の辺りに発展したのではなかった。洪水も旱魃も、——特に山地がなお森林に覆われていた昔は——後者のように圧倒的ではなかった。だから

河川に対する共同の闘いは、なかんずくオリエントにおいてその統合効果を発揮した。そこでの太古の文化国家の形成の最も重要な物質的基礎を、それが形成したと思われる。伝説には、その記憶がなお維持されている。

メネスがエジプト帝国の創立者と見なされている。エジプトの聖職者が話したという、ヘロドトスの報告によれば^(訳注5)、メネスはメンフィスの上流約100スタディオン(18.4km)のナイル川に一つの堤防を築き、それによってリビアの連山を流れていた河川を、以前の河床から離して、二つの山脈の間を流れるようにした。その後、彼は、堰き止めた土地が固まった後に、今日(ヘロドトスの時代に)メンフィスと呼ばれた都市を造った。だが、都市の北方および西方に向かって、メネスは湖水を掘らせ、河川から注ぎ込んだ。巨大な貯水池が、後に日照りの時に耕地を潤すために、洪水のときの過剰な水を受け入れた。

いわゆるモエリス湖は、そのような測り知れない貯水池に他ならない。

エジプトと同様、中国でも、帝国の建設は河川調整に遡る。孔子の後継者の孟子の語るところによれば^(訳注6)、「堯の時代には、天下はまだ穏やかではなかった。大水が洪水を引き起こし、水路が失われ、草木はぼうぼうと生い茂り、鳥や野生動物が溢れ、肝腎の五穀はさっぱり稔らず、鳥や野生動物が人間を脅かし、野生動物の足跡がついた道と鳥の足跡が互いに交差する。……禹は黄河の九つの支流を分け、済水・漯水の水路を浚って海に導き、また汝水・漢水の水路を切り開き、淮水・泗水を浚ってその水を揚子江へ流しこんだ。このようにしてはじめて中国の住民は自分の食べ物を手に入れることができるようになった。」

ユーフラテスとティグリスおよびガンジスの河岸平野の帝国についてわれわれが知るところでも、その物質的基礎は主として水利調整施設で、その手入れはどの支配者にとっても、第一の義務であった。英国人はこの義務を最近までまったくおろそかにしていた。飢饉と悪疫がその結果であった^(原注1)。英国人の支配は経済的な必要性に基づくのではなく、軍事的優越性に基づいていた。

河川に対する共同の闘いと外敵に対する共同の闘いはしばしば同時に作用し、一方が他方の影響を強める。それにもかかわらず、二つの要因はわれわれの意味での民族的生活(nationales Leben)を可能にする。両者とも村落自治団体(Dorfgemeinde)あるいはマルク協同体の経済的自足性を掘り崩さず、それによってその排他性を非常に高い程度にまで継続させるからである。

アナキストの理想は、自律的な自治団体の連合(Föderation der autonomen Gemeinden)である。どの自治団体もそれ自体完全に独立して営まれるべきである。一自治団体(あるいは集団)が太刀打ちできない大きな仕事の遂行には、他の自治団体との自由意志による連合がなされるべきである。この理想は、未来のものではなく、まさに見てきたように、非常に遠い過去のものである。だが、その結果は測り知れない個人的な自由ではなく、東洋的専制(der orientalische Despotismus)であった。

実際、外敵に対する闘いが繰り返されるほど、灌漑の調整に必要な仕事が巨大になるほど、中央権力は、個々の協同体を超えて力と意義をますます増大せざるを得なかった^(原注2)。労働者の扶養のための労働給付と現物給付が確定されると、完全には必要としない場合にも、結局必要な土木工事が行われた。水利施設が土地を肥沃にしたので、同時に人口と協同体の数が増加した。連合した協同体の給付により労働力と食料品の過剰が生じ、中央権力はその利害判断でそれを利用することが徐々に起こった。それによって、彼ら自身は労働の必要から解放され、その機能に従って、特に戦士、建築士および天文学者から構成される貴族層となる。彼らが意のままにする労働力と食料品の過剰が時にはどれほど途方もないものになりうるか、今日なお、例えばピラミッドのような多くの制作物によってわかる。

この発展は、当然平和的には行われない。中央権力は個々の協同体の支払いをできるだけ高く引き上げようと努め、逆に、協同体は支払いをできるだけ押し下げ、あるいはむしろ慣習的な水準を維持するよう努めた。だが、中央権力の廃棄を考える者はいなかった。それは、すべての経済生活を問題にすることを

意味したのであろう。

東洋の文化諸地域の歴史の性格全体は、ここから説明される。個々の共産主義的村落自治団体はいずれも自分のために生きている。その生産様式は数千年の間つねに同じであり、それゆえその社会組織も同じである。農民は永遠の不変性のなかに生き続け、その父がなしたように強制労働や十分の一税を支払い、支払いが増えず、必要な工事が可能な状態である限り、その支払いによってできることを、もはや気にしないのである。王や皇帝やスルタンが、望むがままに、その周囲に対して残忍であったり温和であったりしても、吝嗇であったり贅沢であったりしても、怠慢であったり禁欲的であったりしても、そんなことは彼らにはどうでもよい。だが、彼が必要な工事を崩壊するに任せたり、支払いを引き上げたりすると、彼らは反抗的になり、どこかに王位要求者が現れれば、彼に押し寄せ、彼が王位につくのを援ける。

これが東洋の革命の内容である。統治形態、被抑圧階級の側からの政治権力の獲得が問題なのではない。問題なのは支配者の人物、支払いの多寡だけである。その職務そのものは問題にされない。これは、特別な「奴隷根性」の気質の結果ではなく、経済的な必要の結果である。生産が可能であるためには、中央権力は無条件に必要である。だが、それが統一的な民族（Nation）の頂点に立たず、諸自治団体の塊の頂点に立つものであるなら、必然的にそのうちのある自治団体が、「自律的」な、アナキストの理想ではまったく独立した、他の自治団体を顧慮することのない絶対主義的で無責任なものとなる。

ここでついでにのみ言っておくと、古い貴族層、すでに名を上げておいたが、——しばしば名目だけの個人的首座による——中央権力保持者は、必ずしもあまり幸福ではないが、戦士カストと聖職者カストであり、すでに見たように、彼らはその形成を経済的な必然に負っている。普通われわれの浅薄な「文化史家」は、彼がそこにいあわせたかのような詳細さで、麗しい時代の人間の本源的平等が如何に乱されたかを語る。最も強い者が共同し、言った。汝らは我らに従わねばならない、さもなくば我らは汝らを打ち倒す、と。そして、最も賢い者がそれに協力して、言った。その助けにより、愚かな人民を欺き、搾取することのできる宗教を、我らに作り出させよ、と。この馬鹿げた「歴史叙述」は、長期にわたる不平等の結果でしかありえない「平等な者」における力と知性の相違を前提として、今度は略奪理論によって繰り返し補充された。それは、ある種族（Stamm）が他の種族の領地を奪い取り、それを征服し、貴族層になることで、階級的差異の形成を説明する。

東洋的専制の支配的貴族層はしばしば外来の征服種族であったし、今もそうであるということは、疑いないことである。だが、そのような種族はそこにあるものを奪い取ることができるだけである。種族が中央権力を奪取することができるのは、それがすでに存在する場合だけである。種族がこの中央権力とその機能を引き受け、人民（Volk）がその支配を甘受するなら、本質的にそれによって何も変わることはなかった。その後、支配階級と被支配階級、両者とも一つの民族（Nation）に融合した。一つの経済的組織の二つの部分であるからである。

だが、征服種族がこの中央権力の機能を引き受けず、征服の法に則ってのみ支配し、搾取しようとした場合、それは外来者に止まり、人々は可能な場合には彼らに反抗するが、結局また屈服せざるを得ず、あるいは人民は完全に零落した。

エジプト人は数多くの外来者支配に耐えた。それに対して、ヒクソスはエネルギーに闘った。わが歴史家たちが貴族の形成について考えたように、彼らは支配者になったのである。これらのベドウィンの群はエジプトに侵入し、そこを征服地とした。彼らはそこを搾取したが、そこを管理する任務に向かわなかった。だから、エネルギー的な民族的反抗（nationaler Widerstand）が生じ、ついには彼らを再び追い払った。

まったく同じというわけではないがよく似た例として、ノルマン人がいる。彼らは、数百年にわたって、

支配を打ち立てることなく彼らに開かれていたキリスト教的西洋を略奪した。彼らは略奪した土地の主人に成り上がるのに成功する前に、まず封建君主の機能を遂行できるほど文明化していなければならなかった(北西部フランスおよびイングランド)。だが、彼らはそこから土着の住民と融合して一つの民族となり、外来者であることを止めた。

征服種族が中央権力を奪った場合には、連合した共同社会の一つと並んで存在し続けた場合よりも、その独立と絶対主義が急速かつ強力に発達することは否定できない。

これらの貴族層が、外来者と自覚することなく、オリエントの文化国家において、その取り巻きとともに、あらゆる民族的生活の担い手になるのは、そのようなものが発展した限りである。彼らはマルク協同体の制限を克服し、君主として自覚し、民族(Nation)全体の代表者としても自覚するようになった。彼らは統一した民族的な言語と文献、民族的な哲学と芸術を創造する。だが、民族生活のこの始まりは常に全人民の小部分、貴族層、中央権力の所在地の居住者、自由都市の住民に制限されていた。奴隷はそこから除外されていた。だが、農民にとっては、マルク協同体、村落自治団体は、彼らの世界のままだった。今日の意味での民族的な生活をつくるためには、マルク協同体が解体し、個人と民族の間にあるあらゆる経済的組織が衰退し、民族が経済的な生活にとって決定的な有機体となることが必要であった。

原生的な共同社会のこの解体が達成されるのは、商品生産と商品交換が一定の高さに達してからであった。だが、近代的民族集団(die moderne Nationalität)が形成されるのには、なお特別な諸条件も必要だった。

商品取引はすでに、固有の階級、商人に仕事を与えるほどの広がりを見せていた。オリエントでは、ヨーロッパでよりも早くに、そのような状況が現れた。しかし、商品交換と商品が発展したのは、中央権力の所在地においてであった。そこでは、労働力と食料品の過剰、彼らが意のままにできる剰余生産物が、贅沢を助長した。そこへ行く手工業者の生産物のために、そして地方の生産物を再び入手する商人の運び込む外部の生産物のために、市場がつくられる。中央権力所在地の富の増大が、強欲な隣人を引き寄せる。だが、無数の強制労働を自由にできる中央権力の建設者は、城壁で市場を固めねばならなかった。その防護は、また商業と工業の拡大を助け、当該の都市を交易路の交差点に置き、都市はじきに大きくかつ強力になる。

だがこの発展全体は都市に限定されていて、中央権力による人民(Volk)の搾取から推進力を引き出す。権力が伝統的な義務を遂行するだけである限り、農民が、彼らが供給した剰余生産物を権力がどう使用するかを、ほとんど顧慮しないように、この剰余生産物から生まれる経済的な発展も人民とほとんど関係を持たない。こうして、われわれは古代オリエントの帝国において、すでに数千年前に、非常に高度な段階の都市の商業と工業を見出す——今日なおエジプトの技術産業の多くの分野を凌ぐものはほとんどない——が、それらの諸国において、今日まで農業において、原生的な共産主義的協同体を見出す。それがどのような名前であろうと、ヨーロッパの資本主義の影響に屈服しない限り、十分に機能している。

ヨーロッパでの商品取引と商品生産の機能は異なっている。そこには、圧倒的な中央権力が闘いを必要とする圧倒的な自然と農民にその必要を超える大きな剰余生産物をもたらす有り余る自然はない。土地の欠乏は大きな軍勢を引きつけず、現実にはそのようなことが起こったときには、土地が狭く痩せている場合、群衆がそうなるのである。われわれは、特にギリシアをその卓越よりも破滅について注目している。

オリエントの大河の谷には、強力な専制政治を鍛造し、その諸都市で商業と工業を育んだ諸要素が欠けていた。これらは、オリエントとの交易に促されて、ゆっくりとしか発展しなかったが、西洋で商品取引と商品生産が根付いていたところでは、人民全体にも影響を与え、社会全体を革命化した。

古典的古代におけるこの影響がどのように形成されたのかを追跡することは興味深いことではあるが、ここでの課題ではない。一方では、当該問題の発展は多くの点で後の中世のそれに相似し、だが他方では、

可能だったオリエントにおけると同様の、言葉の完全な意味での民族的生活をつくることはできない。それは西洋において原生的な協同体を減ぼすのであるが、新たな基礎を生み出すことができないので、それによって社会一般を減ぼすのである。古代の自治体的な狭隘さ（*die kommunale Beschränktheit*）が克服されるのと同じ程度で、社会もますます生きた有機体であることを止め、死体になった。その腐敗過程は皇帝時代に生じている。奴隷制度は残り、それとともに労働者は民族（*Nation*）から排除された。民族は萎縮して——そこで民族について語りうるとして——、一連の被搾取者、上層および下層の賤民、ルンペンプロレタリア、そして成金になった。

中世における発展の結果はまったく異なっていた。そこから近代的民族集団（*die moderne Nationalität*）が出現した。だから、われわれは少々詳しくそれを考察したい。

封建制度の基礎をつくったのは、マルク協同体における農民のおよび職人的な生産様式であり、それは、例えばインドの村落自治団体（*Dorfgemeinde*）と同様に、自律的で、経済的に自立し、排他的であった。中世の都市自治団体（*Stadtgemeinde*）はマルク協同体から成長した。

オリエントにおけるように、中世の西洋においても、この小さな共同社会は外敵に対する、部分的には自然に対する共同の闘争を通じて連合した大きな「国家」になった。この要因の影響は、オリエントにおけるよりも弱かったのであるが、数多くの他の影響によって、特に新しい諸国家のローマ的な基礎によって、発展はむしろ複雑なものになった。オリエントにおけるほど堅固な中央権力はつくられず、支配階級がその機能——兵役と管理業務からの農民の解放——のためにポケットに入れる剰余生産物は、それほど重要なものではなかった。それは、緩慢にイタリア、ビザンツ、およびオリエントとの商業、並びに職人的な商品生産の復活を促したにすぎない。

世俗の権力者の館に、司教座に、並びに、例えばアルプス越えからの道がライン川やドナウ川に達する確実な結節点に、パリやロンドンのようなあまり喫水の深くない海船でも航行可能な内陸の港に、商品の集散地が造られる。それらは、今日のわれわれには重要でないものと思われるかもしれないが、付近の住民、特に封建君主およびハンガリー人やノルマン人等々の外敵の渴望を刺激した。それらを確保することが必要となった。それによって、村からの都市の発展が始まった。

だが、壁を巡らせた後も、マルク協同体の枠内で自己使用一般のための農業と生産は、確保された土地の住民の主要な仕事であり続けた。商業はその性格に影響を与えるにはあまりに微々たるものであった。都市の市民は、村の農民と同じく、偏狭固陋で排他的なままであった。

だが、マルク協同体の古く完全な資格を持つ門閥と並んで、直ちに新たな権力が生成した。それは、マルク協同体の手本に従った協同体、ツunftに組織された職人の権力であった。

職人層は影響力と数を増大させたが、大部分はマルク協同体および都市の統治から締め出されたままであった。都市の統治は、共産主義的な農民から高慢な貴族になった、もとのマルク仲間の後継者に委ねられたままであった。ツunftと門閥の間の階級闘争が緩和し、通常、前者の勝利で終わった。同時にそれとともに都市の封建君主からの自立のための闘争が起こり、しばしばその独立をもたらした。

諸都市は、封建君主の援助と管理を必要としないほどの十分な強さを持つようになった。彼らは、彼ら自身と家人を気遣う諸機能のための税を支払うのに飽きた。ゲルマンの農民的なマルク協同体が国家権力に対するその振る舞いにおいて、しばしばオリエントの村落自治団体に似ていることを示す一方、われわれは、ツunftの職人層が優勢な都市において、まったく異なる精神、小市民層がその後完全に失うことはなかった共和主義的な傾向を発見する。地方の有力者が統治の業務をどのように行うかは、諸都市にとっては決してどうでもよいことではなかったから、民族的生活の萌芽が活気づいた。彼らはすでに農民的マルク協同体の遥か遠くへと影響力を持とうと努めていた。

だが、マルク協同体の以前の排他性は克服されず、ただ有効な地域が拡大しただけであった。民族（Nation）ではなく、自治団体（Gemeinde）がツンフト市民にとって第一であった。

たしかに職人的商品生産は、都市のマルク協同体の完結性を打ち破った。職人は都市のためだけでなく、しばしば広い範囲の周辺の地域のために働いた。ほとんどすべての必要なものを自分で作り続けていた農民のためではなく、その搾取者、隷属する職人がほとんど都市に逃げていなくなってしまった封建君主のためである。他面では、職人たちは食料品と原材料を郊外から買っていた。経済的な相互作用、だが都市と農村の間の対立が始まった。マルク協同体に代わって、経済的な単位となったのは、ますます大小の農村地域を持つ都市であった。多くの都市が、共同の目的を達成するために、永続的あるいは一時的に連合したとはいえ、個々の都市相互の隔離状態は、そのままであり、持続した。

諸都市はますます強力になり、独立性を強めた。一時期、ヨーロッパ全体が都市共和国の塊になるように見えた。しかし、この傾向は現実には小規模にしか現れなかった。個々の都市の内部では、個々の都市と地区から近代諸民族（die modernen Nationen）を鍛造するような新しい力が発展していたからである。大規模商業の革命的力である。

オリエントと、特にコンスタンチノーブルとエジプトとの海外交易が、ヨーロッパで、まず南イタリアで発展した。商人がオリエントの古い文化地方からヨーロッパの蛮族のためにもたらしたものは、この数えきれない魅惑的な富であったと思われる。それらを持ち、取得しようという渴望が、直ちにすべての支配階級を把握した。それは、十字軍の名前で知られている東方への略奪と征服の傾向に強く貢献した。だがそれは、地理的に有利な立地にあるすべての都市でも非常に儲けの大きい商業に参加しようという志向を呼び起こした。次に、北イタリア。

商業が発展するほど、貨幣が大きな力になった。貨幣は誰もが手に入れ、誰もが必要とする商品であり、それによってすべてのものを手に入れることができた。貨幣を取得し、商品を生産し、あるいは商品取引する階級はますます重要になった。そして、仲間の数の制限によってのみ、程よい繁栄に達することのできたツンフト親方が、すぐに商人によって凌駕された。その利潤熱は際限なく、資本は無制限に拡大でき、彼にとって最も好ましいもの、商業利得は膨大であった。

商人資本は、14、15、16世紀の革命的な経済力であった。それによって、新しい世界が社会に到着し、新しい見解が呼び起こされた。近代的民族集団（die moderne Nationalität）が生まれる。

中世では、われわれは、一面では偏狭な分立主義と田舎町根性、他面では西洋全体のキリスト教世界の領域を包含するコスモポリタニズムを見出す。それに対して、民族的意識（nationales Bewußtsein）は非常に弱かった。

大商人は、農民や職人のように小さな区域に閉じこもっていることはできなかった。彼にとっては、全世界はおそらく彼に開かれていなければならない。彼はますます努力し、ますます広い市場を開拓しようとした。しばしば生涯にわたって自分の都市の地域を超えることのなかったツンフト市民とは反対に、われわれは、商人が止むことなく未知の土地に突き進むのを見る。彼は、ヨーロッパの境界を超えて、インドやアメリカへの航路を見つけ出すことで頂点に達する発見の時代を開始する。だが、その時代は、厳密に言えば、今日もなお持続している。今日もなお、ほとんどの発見の旅の推進力は、商人であり、学問的研究者ではない。

商業は、土地への緊縛に代えて、何か儲かるものがあればどこでも気に入るコスモポリタニズムを置いた。だが、同時に、それはカトリック教会に表現された中世の普遍性に、民族性（Nationalität）を対置した。世界貿易は西洋の人々（Völker）の視界をカトリック教会の地域を超えて広げ、同時にそれを自民族（eigene Nation）の領域に狭めた。

それは逆説的に聞こえるが、説明するのは簡単である。中世の小さな自己充足的な共同社会では、そもそも経済的な相互対立はほとんど存立しなかった。彼らにとっては、外部世界は、それが彼らを平穏にしておいてくれる限り、ほとんどどうでもよかった。

共同社会の大商人は、それに対して、世界市場で競争に、他の共同社会の商人との敵対に遭遇した。さらに、買い手は売り手との利害対立の中にあり、通常世界市場においては、両者は出自が異なっている。だが商業利潤は、人ができるだけ安く買い、できるだけ高く売ることから生ずる。それ以外は、同じ状況のもとで、他者よりも立場が有利なほど、当事者にとってますます利潤は高くなる。その背後にある力は決してどうでもよいことではない。

ある例がそれを明確にするだろう。コンスタンチノーブルで、ヴェネツィア人やジェノヴァ人の買い手は、ギリシア人の売り手と協力した。ヴェネツィアが強力になるほど、コンスタンチノーブルで、より大きな商業特権が得られ、ヴェネツィア商人のギリシア商人並びにジェノヴァ商人に対する立場はよくなった。前者に対しては買い手あるいは売り手として、後者に対しては競争者として。

外部市場における利害対立は、民族的な (national) 対立になったが、それは民族的な統一と大きさへの志向をも生み出した。祖国、民族が大きく、強力になるほど、外国における商人は強力になり、その利潤は大きくなる。

今日なお、外国の商人におけるより、排外主義が大きいところはない。そして、われわれの経験では、ドイツ人の商人がこの点で先頭に立っている。「ケルニツシェ・ツァイトUNG (Kölnische Zeitung)」の在外通信員は、パリ、ロンドン等の「ドイツ人居留地」の支配的な精神のおおよその表象を与えている。他の点では、ドイツ人商人は、「民族主義的 (national)」であるあらゆる原因を持っている。以前、彼は世界市場で南アフリカ共和国でさえ嫌がる最も悲しむべき姿を演じていたが、ドイツ帝国の成立以来、尊敬すべき人物になり、もはや、彼に難題を持ちかけようとあえて試みる者はなく、有利な通商条約に守られて仕事をしている。ドイツ人商人のような利益を「民族的統一」から受けている階級はほとんどないであろう。

世界貿易の発展により、同時に強力な経済的利益が生ずる。それは諸国家を自治団体 (Gemeinde) の緩やかな組織からしっかりした統一体へと打ち固めた。だが同時に、相互の隔離とそれによる互いによそよそしい諸民族 (Nationen) へのキリスト教世界の分裂を助長した。

ひとたび世界商業が生成した後は、国内商業は同様に民族国家 (Nationalstaaten) の建設に貢献した。

当然にも商業は、より大きな貨物集散地に、より大きな地域の街道が会合する交差点に集中する傾向がある。そこに外国の商品は集められ、この中心から街道と小道の広く分岐したネットを通じて国全体に広がるようになる。同じ交差点に国内の商品が集められ、そこから外国に移動する。そのような貨物集散地を支配する地域全体が一つの経済有機体になり、その連関が緊密になり、中心点への依存が強くなるほど、商品生産はますます発展し、自己使用のための生産が駆逐される。

中心点が支配する全域から人間が中心に合流する。ある者はそこに止まり、他の者は仕事を終えた後再び帰郷する。中心地は繁栄し、一大都市になり、そこでは、経済的生活のみならず、そこに依存する精神的な生活も集中する。都市の言語は商人と教養人の言語になり、それらは普遍教会の言語であるラテン語を駆逐した。だが方言をも駆逐した。民族語 (Nationalprache) が形成され、民族的な文書と芸術が形成される。

国家行政は経済的な組織に適合する。それもまた集権化し、政治的中央権力が経済生活の中心に本拠を置き、それは、今や経済的および知的にのみならず、政治的にもそれが支配する国の首都になる。

発展全体が、資本が商品取引だけでなく商品生産をも捉えるほどに加速される。まず、資本主義的生産様式の支配のもとで自己使用のための生産が消滅し、取るに足らないものになり、商品生産が生産の一般

的な形態になる。だが、自己使用のための生産と同時に、それが生じてきた社会的な生産組織、マルク協同体、家父長的家族も消滅し、そうこうする間に、各個人の物質的な繁栄も、全民族の繁栄、力と大きさに、ますます多く依存し、それがますます感じられるようになる。

自己使用のための農民の家内工業に代わって、国内のおよび国際的な市場のための資本家が給金を出す家内工業が現れる。農業においても商品生産が増大する。工業が栄え、発達し、民族内部の制限は商業交通を妨げることが少なくなり、輸出が大きくなり、通商条約が有利になり、資本家の利潤が高くなるほど、農民はますますその商品により高い価格を目標とし、彼らは穀物、肉、ワイン、毛皮、亜麻等々をますます多く求める。それによって農民も民族（Nation）の統一と大きさに関心を持つ。

封建制とマルク協同体と同時に、騎士軍も死滅する。歩兵が再び主要な軍勢になる。軍隊は再び農民軍になる。第一に自作農民、傭兵の軍隊である。だがすぐに織工が農民を鋤から迎えにいく。こうして農民は民族（Nation）の統一と大きさのための戦いに引き込まれる。王宮や都市は、しばしば王朝戦争あるいは貿易戦争として現れるこの戦いを導く。農民はそれらが蒔いた種を刈らねばならない。民族的軍隊の統一の中で、農民はその地方的な特性をそぎ落とし、戦場において、敵対する諸民族（Nationen）に対する憎しみを吸収する。

こうして農民は、ますます民族生活（nationales Leben）に入り込み、それは都市に限定されたままのものではなかった。

そして勤労住民の最下層も民族生活から排除されたままではなかった。この階層はもはや、奴隷という生きた商品によってではなく、自由なプロレタリアートによって形成される。資本主義的生産様式は、隷属や強制の制約に妨げられることなく、自由に、だが自由に資本に買われる必要に強制されているという、法的な意味で自由に、その労働力を意のままにできる労働者を意のままにすることができなかつたら、繁栄することはできなかった。

古い封建経済と封建国家に対する対立が問題である限り、プロレタリアートの利益はブルジョアジーの利益と同じだった。資本主義的生産様式の発展を妨げる桎梏は、ある点まで賃労働者にとっても、賃労働者ができるだけ有利にその労働力を売りさばくのを妨げる桎梏であった。資本主義的工業が急速に発展するほど、国内および国外の市場がより開放されるほど、賃労働者への需要が高まり、高い賃金がよく見込まれる。これは特にマニファクチュア・システムのもとで妥当する。その場合には機械はほとんどいかなる役割を演じず、労働者を無用のものにするとはほとんどなかった。国内あるいは国外における交通のどのような障碍も、どのような不都合な通商条約も、民族の統一と大きさを弱めるものすべてが、労働者の状態に不都合な仕方では影響を与えた。そして逆に、民族の統一と大きさのどのような前進も、労働者階級の前進を意味したのである。

特別な事情の結果、英国の労働者は、なお少し前には、外国に対して英国の資本家と連帯感を持っていて、それゆえ強い排他的民族政策（nationale Politik）を追求した。ブルジョアジーが革命的である限り、これが一般に妥当した。

近代のプロレタリアートはとりわけ農民階級と職人階級からリクルートされる。だが、土地あるいはツンフト組織からの分離によって、農民と職人の地方分立主義を生み出す偏狭固陋な地方的な利益も消滅する。農民とツンフト市民（Zunftbürger）は、その自治団体の外では地歩を失う。故郷に止まり、正直に暮らせという格言が彼らには妥当する。それに対して、プロレタリアート、なにかんずく無産となった農民は、故郷の自治団体に止まると、最悪の見込みしかない。彼がその労働力をできるだけ高く売りたいときに、仕事を探そう努める場合には、民族（Nation）の領域全体が彼に開かれていなければならない。こうして、他のすべての事情を無視すれば、すでに任意移動の欲求は、プロレタリアートを、その生存条件がブ

ルジョアジーと同様に民族的統一を必要とする一つの階級にする。古代の奴隷制は類似の現象を少しも示さなかった。

こうして、14世紀からの経済発展の結果、人民の全階級を包含する近代的民族集団（Nationalität）が、徐々に形成される。それは資本主義的商品生産と商品取引の子供であり、それゆえ、本質的に、その拡大と形成を規定する交通諸関係でもある。

民族（Nation）の拡大を規定する要素の一つは、もちろん地理的なものである。例えば、迂回の多い山脈や急激な河川は、原生的な諸協同体の一つの民族への統一を困難にする。それに対して、航行できる河川とその支流は、その地域内にある諸共同社会の統一を非常に助長する。民族やその中核が形成される場合は、地方とその首都の軍事的な状況が、商業地理的な状況と並んで重要である。自領域の防衛および近隣への攻撃ができるだけ容易になるように境界を形成することは、近代のどの民族にとっても重要な配慮である。フランス人がアルザスの占有を諦めることができない重要な理由の一つは、ライン川とヴォージュ山脈が東からの攻撃に対するパリの唯一の自然的防衛手段をなしているという事情である。人工的な城塞は、この自然の柵の一時的な代替物にすぎない。

そして、イタリアが、コルシカや、サヴォイアやティチーノと同様、トレンチーノへの強い熱望を抱き、南チロールのイタリア側部分だけでなくドイツ側部分にも欲望を持っている——多くのイタリア人にとっては「未回収のイタリア（Italia irredenta）」はブレンネロまでである——のは、トレンチーノがイタリアの最も豊かで工業的な部分に対する格好の攻撃陣地を提供している、すなわち北イタリアの真の肉中の棘をなしているからである。

だから、その住民が決して併合を要求せず、征服民族と経済的利益が一致しない地域を諸民族が併合する、ということが生ずる。だが、しばしば政治的な統一から経済的な統一が生じることがしばしばある。その場合、征服民族のなかに征服された共同社会が現れる。

だがしかし、諸民族の形成に際して最も重要な要因は、不可欠な交通手段を表現するもの、言語である。意思疎通なしでは、それゆえ言語なしでは、社会的生産は不可能である。そして、生産システムが複雑になり、拡大され、変化しやすくなるほど、生産の継続のために言語がますます不可欠になり、統一した言語を必要とする領域はますます拡大し、ある領域にとってのボキャブラリーがますます多様で豊かなものになる。——もちろん他の領域にとっては、それは同時に非常に著しい制限を受けることがありうる。

言語の相違は社会的交通の最大の障碍の一つをなす。商品取引と商品生産は、それゆえ最初から同じあるいは類似の言語を話し、その成員が苦勞なく互いに意思疎通する共同社会を、一つの民族（Nation）に統一しなければならない。誰もが自然に、一緒に働き、総じて経済的に結合することを選び取り、それによって意思疎通することができる。だから、近代の経済発展が前進するのと同じ程度に、同じ言語を話す全ての者にとって、共通の国家体制に纏まろうという欲求が生じ、成長する。同じ言語を話す者たちを分かち制限を投げ捨てる欲求、交通を不可能にしたり弱めたりする他の言語を話す者と分離する要求である。

近代の諸民族を形成する非常に多様な影響が、一緒に作用する。諸影響は、すぐに互いに衝突し、すぐに取り消され、すぐに強化された。近代の諸民族のどれも他の民族と正確に同じ仕方で出来上がったものはないが、そのどれもが同じ経済的發展、資本主義的商品取引、資本主義的商品生産の産物である。奴隷および多くの農民が民族生活から排除され、その大きさと統一に利害を持たなかった古代およびオリエントの諸民族とは違って、近代の民族は住民の全階級を包含している。だがにもかかわらず、近代的民族理念（die moderne nationale Idee）はブルジョア的理念（bürgerliche Idee）である。近代のブルジョア層と近代の民族集団は、同じ土台から生じた。そこでは、一方の発展が他方の発展を助長し、逆もそうであった。民族理念が果たす役割は、ブルジョアジーが受け取る役割にかなり照応している。

これが革命的である限り、民族的な大きさと統一のための戦いは、最高の無私の闘いとして、無償で、待望するその理念のために喜んで苦しみ、死ぬ、靈感を受けた数千の英雄を生み出す闘いとなされる。今日、民族理念は最も腐敗した利潤渴望と野心の隠蔽手段となっている。かつては、民族のためにすべてをという民族的ブルジョアジーのスローガンは、今日では、民族のすべてをという内容である。民族理念の経済的基礎は、今やあからさまなものになっている。

(2)

近代的国家の古典的な形態は民族国家 (Nationalstaat) である。だが普通は、古典的な形態は傾向としてのみ存在し、完全に純粹に発展することは稀である。近代的生産様式の古典的な形態は資本主義の大工業であるが、それと並んで以前の生産形態の多くの残滓がなお存在しているのと同様、今日でもなお、純粹な民族国家、全民族を包含し、それと同時に、まったくあるいは断片的に他の諸民族を含まない国家は、存在しない。民族国家の形成も、諸民族そのものの形成も、完了していない。

ヨーロッパには、民族集団 (Nationalität) を基礎としない国家はわずかしかなかったが、このわずかな国家は近代国家ではない。首都のない農民共和国スイスや、ハプスブルク君主国あるいはツァーリ帝国である。

オーストリアの諸邦を一つの全体に統一したのは、経済的發展ではなかった。これらの諸邦国は統一的な経済地域を形成していなかった。それらを固く結びつけるように強制したのは、15世紀以来17世紀までのオスマンの襲撃だった。それは南スラヴ、ハンガリー、チェコ、南東ドイツの諸邦すべてを脅かした。それらが共通の指導者に逆らって、ハプスブルク家の下に兵力を出さなかったときには、敗北した。ハプスブルク家は、トルコの半月旗に対するヨーロッパの擁護者となった。それが敗北すれば、まずドイツ、とりわけ南ドイツが脅かされた。ドイツの諸侯は、以前からフランス人やスウェーデン人にはトルコ人に対するような不安を持たなかった。トルコ人を遠ざけておくことが、ドイツ人皇帝たちの最後の現実的機能、なお君主の権力を彼らに残している唯一の機能となった。こうして、ドイツ皇帝の称号は、ハプスブルク家に相続されることになった。

前世紀にトルコの危険の減少によって、ドイツ民族の(神聖)ローマ皇帝の最後の機能がなくなった。フランス革命は、他の幻影と同様、これを終わらせた。だが、トルコの危険の終了によって、オーストリアの諸邦をまとめていた束縛も解消し、遠心的な傾向もそこで発展し始めた。それがいくらか弱まったのは、新しい共通の敵、ツァーリのロシア帝国、汎スラヴ主義の登場によってであった。特にこれに脅威を感じたし、今も感じているのが、オーストリアの二つの民族構成要素 (Völkerbestandtheil) であるポーランド人とハンガリー人である。彼らは両方とも、オーストリアでの国家を支持する要素となっていて、今や、彼らが君主国を支配していることは驚くべきことではない。

それにもかかわらず、汎スラヴ主義も永遠に続くことはないだろう。スラヴ世界全体のツァーリズムへの屈服を熱望する、この自称「民族的な」運動は、個々のスラヴ種族集団 (Völkerschaft) の現実の民族的生活 (nationales Leben) と相容れないものである。東洋的専制と同様に、ロシアの絶対主義もまた、人民大衆 (Volksmasse) の各々の民族的政治生活の不在に、その自治団体の農民の偏狭固陋に基礎を置いている。農民は、自治団体内での自利に配慮し、それに対して自治団体の外部で生ずることを気にすることなく、その地域の外部にあるすべての問題を、敬愛する主なる神と賢明なツァーリに任せる。神とツァーリは、農民にとって、ほとんど等しく遠く、等しく万能で、等しく理解し難いものに思われる。

自治団体共産主義 (Gemeindekommunismus) の消滅によって、自治団体の偏狭 (Gemeindebornirtheit)

も消滅する。資本主義の発展の促進は、民族生活の促進をも意味する。ツァリーズムは、あれこれの方向での発展の加速に全力を尽くす。その結果、民族的政治生活が、ペテルブルクやモスクワだけでなく帝国全体でも力を得る。遠心的な民族的傾向が成長し、小ロシア人が活動し、ロシア・ポーランド人の民族的運動は抑圧されず、反対に再び成長するように見える。これらの遠心的な傾向は、ツァーリ絶対主義が議会主義的な支配によって代わられるなら、非常に強力になるに違いない。汎スラヴ主義は、それによって強力であることを止めるだろう。だが、これは「国家を支持する」オーストリア・ポーランド人とハンガリー人が「帝国の敵」へと移動することを意味する。彼らは憎らしい「シュヴァーベン人」^(訳注7)との最後の絆を緩めようと努力するだろう。それに対して、もはやシュヴァーベン人もそれほど反対することはできない。

オーストリアやロシアにおいては、政治家は、統一したオーストリア民族集団 (Nationalität) やロシア民族集団の創造によって差し迫った混乱に対抗しようとしたし、現在もしようとしている。学校、官僚制、軍隊が、ロシアにおいてはこの目的に役立っていたし、なおそうである。だが、この領域での画一化によって、生活全体を支配する中心点を持つ統一した経済的有機体への接続がうまく進まないの、それらは少ししか効果を上げていない。オーストリアでは、このことは問題ではない。確かに、ある点で多様な経済領域相互の連関がますます緩むように見える。ウィーンはオーストリアの経済的中心点であったかも知れないが、みるみる意義を失っている。ハンガリーと隣接地域からスイス、南ドイツ、フランス等との食料品取引、特に小麦の取引は、ウィーンの代わりに、ますますブダペストに集中している。他面では、オリエントへのオーストリア工業の製品の取引は、大部分ウィーンの仲介の必要なしに、直接にトリエステやブダペストを経ておこなわれる。

大工業の北部ボヘミアは、言語的だけでなく、地理的および経済的にもエルベ川の交通路によってドイツと密接に結びついた経済地域を形成している。そこでは、「ドイツ民族的な (deutschnational)」運動が何よりもまず行き渡っている。それに対して、同様にドイツ的 (deutsch) だが農民的なアルプス地方は、なお中世的な地方分立主義を保持している——それが帝国の首都から離れているほど、そうであり、——そして、民族的活力 (nationaler Geist) をあまり発展させていない。近隣のよく似た経済的發展状況のスイス人と同様に、例えばチロール人には、なお地方分立主義が詰まっている。バイエルン人でもまだそれは強い。

それゆえ、オーストリアのドイツ人は統一した経済地域を形成することさえできない。それとともに、われわれはハンガリー、ダルマチア、ガリツィアという特別な地域を見出す。後二者は、言語的、経済的、地理的に北部ボヘミアと同様に、隣接する外国を横目で見ている。結局、北部ボヘミアのドイツ人地域、アルプス地方、ポーランド人とハンガリー人地域の間に、われわれは、あまり確たる境界のない、大部分はチェコ人が住んでいる、独特な主に農業的な経済地域を見出す。もちろん、その利益は外国を睨んだものではないが、ツァリーズムは、彼らの隣人、競争者および反対者であるドイツ人、ハンガリー人およびポーランド人の共通の敵であるので、彼らは汎スラヴ主義を格別に好んでいる。

今日、経済的対立がより先鋭になり、どの経済地域もその都市的あるいは農村的工業を促進するよう一層努力し、そして近隣の経済発展を阻害することなしにそれを成し遂げる可能性が少なくなるほど、オーストリアの様々な経済地域はますます離れるよう努めなければならず、「言語問題」を解決することに成功したとしても、民族集団の「宥和」の政策は、ますます困難になる。

* * *

民族的対立（nationaler Gegensatz）を生み出した経済的な対立が存続しているときに、「言語問題」の解決によってそれを除去することが滅多にないことは、アイルランドがはっきりと示している。アイルランドは500年来イングランドの持ちものである^{（原注3）}。クロムウエルの時代以来200年以上、アイルランド民族集団の根絶、アイルランドのイングランド化が、間断なく最も野蛮な無分別さで行われた。アイルランドの言語は英語になっている。文書、芸術そして科学は英語であり、この不幸な島について多くのことが問題になる。確かに、アイルランド人とイングランド人の間の民族的な対立は持続していて、グレートブリテンが姉妹島にその民族的な独立を返還することによってしか、和解は始まらない。

両者の経済的な対立は、まさに存在し続けている。アイルランドは決してイングランドの一部ではなく、常に搾取され征服された植民地であり、叩きのめされようとした競争者であり続けた。アイルランドの経済的な発展は、あらゆる手段で妨害され、その製造業者は駆逐され、その農業は破壊され、人民は無知と貧困に止められた。アイルランドに対しては、アメリカの植民地に対すると類似の政策が押し付けられた。だが、アイルランドは、アメリカより近く、弱かった。民族的独立（nationale Unabhängigkeit）もそれによる経済発展の自由も獲得することもできず、イングランドの経済地域の一部となり、イングランドの経済発展の利益にあずかることもできなかった。

* * *

オーストリアの例が示しているのは、民族国家（Nationalstaat）でない場合に、国家が近代的発展の諸要求に応え得ると証明されることが如何に少ないかである。アイルランドが示しているのは、ブルジョア的な発展の初め以来の人民（Volk）の経済的な福利が、その民族的独立、特別な自立した国家における民族（Nation）の組織化と、如何に密接に結びついているかである。そのために他の例をさらに求めることはしない。ドイツ自身が、イタリアやポーランドとともに、この命題にとって能弁な証拠書類を提供している。

イタリアと同様ドイツの経済的な発展は、16世紀にかき乱された。南アフリカ経由の東インドへ航路の発見とアメリカの発見以来、商業は地中海沿岸から大西洋沿岸へ移動した。イタリア、南フランス、南ドイツは、15世紀までは、ヨーロッパの経済発展の頂点にあった。それ以後、それらはポルトガル、スペイン、それから北フランス、ネーデルラントに凌駕された。

経済的な停滞は民族感情（nationales Gefühl）の衰弱を結果した。これは、ドイツとフランスでは、17世紀よりも15世紀に強かった。小国家分立状況と小都市分立状況は両民族の典型的な特徴である。それらは無力にも外国の支配に委ねられ、有力な隣国は、当然にも、民族的な分裂（nationale Zerrissenheit）と経済的な遅れを維持し、彼らにとって危険な敵および競争者がよみがえるのを心配して、全力を尽くした。経済的な遅れは、民族的な分裂と非自立性を伴い、それらは再び、経済的発展の新たな障碍になった。これがまったく食い止められて、ドイツにおいて家父長的な状態が保持されたというわけではないが、その間に、フランスとイギリスでは資本主義が発展し、小農民と職人を徴用し、妻子を持つプロレタリアを工場での終生の強制労働につかせた。ドイツの人民（Volk）だったら容易にこのような喜びを受け入れただろう。だが、初めには目立たなかったが、諸国での資本主義の破壊的な結果が、急速な工業的な発展とともに認められた。他方でドイツは、イタリアやポーランドと同様に、資本主義の影響に対して決して保護されることのないままであった。外国の商品がやってきて、国内の産物と競争した。商品取引は、自己使用のための生産を、ますます押しのけた。農民と職人のプロレタリア化が生じたが、自作農民は、フランスやイングランドのように、賃労働者として彼らを吸収する資本主義的な工業を見つけることはなかった。工場を創設することは、資本主義の初期には幸福に満ちた出来事であり、工場主は人間の恩人と見なされ

た。経済発展の妨害は家父長的な幸福の保存を意味しなかった。それは、強力な資本主義的商品経済の代わりに、乞食経済が現れるにすぎない。そこには、なお十分に封建的な残滓が貼り付いていて、それを横柄で滑稽なものにしていた。イタリアとポーランドにひけを取らない経済について、17・18世紀にドイツにおいても、多くの例を見出すことができる。

傷を持つ者は、嘲笑を気にする必要がない。その優勢によって発展を妨げ、腐敗を強制するような隣人が、最も多くそれを笑いものにするということは、驚くべきことではない。この点でフランス人がわれわれになしたことを、同様に、弱かろうと強かろうと災難に見舞われた隣人であるイタリア人やポーランド人に、われわれは与えている。今日なおプロイセンのユンカーは、学問的従者を用いて、ポーランド人を下級の人種（Menschenrasse）だと見下すのを好んでいる。その際、彼らは知らないかのように、ポーランド人の腐敗があるとしても、それは少なくともロシアと同盟してポーランドを海から切り離し、ポーランドの経済的および民族的発展を麻痺させ、ポーランドを向上させることを可能にするようなあらゆる要素を抑圧するプロイセンの政策に決して遡るものではないとするのである。

優勢な隣人によって民族的な統一と独立が妨げられているところでは、支配階級だけでなく、人民全体も苦しんでいる。

* * *

民族的な統一と独立を目指す努力が生み出す闘いは、数世紀来続いている。民族の内部の集中を目指す要素と分立的な要素との間の闘争、境界の保全、商業の利益、まさに存在そのものための様々な民族の間の闘争、それらは長い間に様々な住民の民族的伝統を生み出してきた。一面では、民族同胞（Nationsgenosse）との共属性の感情、他面では、代々の仇敵に対する嫌悪の感情であり、それらはほとんど本能になり、遺伝性の、その影響力を発揮するのに少しの刺激しか必要でない素因になった。こうして、民族感情は、経済的な発展との関連なしで、独立して作用する推進力になり、それは事情によってその障碍となることもありうる。

民族集団にとっては、他の歴史的範疇にとってと同様、ゲーテの次の言葉が妥当する。

条理が非条理となり、
善事が苦悩の種となる、
子孫に生まれたものこそ、気の毒な話だ。（訳注8）

民族国家（Nationalstaat）における近代社会の総括と分離は、新しい経済的な発展の動力であった。この分離はある限界で不必要なものになり、それ以上の発展の障碍になった。

近代的生産様式が発展するほど、民族国家（Nationalstaat）がその要求を満足させるべきなので、それはますます大きくならねばならない。大工業の個々の経営が競争力を維持するべきなので、ますます規模の大きなものにならねばならず、ますます強力なものにならねばならない。それらが売りつける製品の数が増え、どの経営もますます一定の専門に専念しなければならない。労働の生産性と社会における分業が成長するが、それによって内部市場の拡大の欲求も成長し、世界市場における有利な交易条件の強奪を意味する、強力な大民族に属したいという欲求も成長する。同時に社会の中間層がますますプロレタリアートに投げ落とされるほど、知識人のプロレタリアートが急速に増大し、新しい地位の創設を要求し、植民地政策によってであれ、いずれかの隣人がそれを自分のものだという「民族的遺産」の未回

収の土地の回収によってであれ、国家の拡大を緊急に要求する。そして、あらゆる「非民族的な」諸要素を民族の仕事から除外するよう要求する。

民族あるいは国家が小さいほど——民族国家でない場合には、より不都合である——、これらの要求を満足させる可能性はますます小さく、自分の国家を大きくし、より大きな隣人と「合併」したいという欲求がますます大きくなる。だから、例えば、ベルギーやスイスの工場主たちが、非常に愛国的に振る舞うことがあるかもしれないが、資本家に「民族的労働（*nationale Arbeit*）の保護を」与えさせることができ、有利な通商条約を達成するのに十分に大きな国家であるドイツやフランスを、国境越しに、内心では憧れを持って見つめている。にもかかわらず、ベルギー人とスイス人は、国内市場が小さいので、保護関税は彼らにとって意味を持っていないだろう。輸出と隣人の善意を頼りにする者にとっては不利な結果しかもたらさなかった。

今日、ハンガリー人とチェコ人が熱病のような性急さで、民族的地域の境界を前進させるのに取り組んでいるが、大きな民族になるか、あるいは自立した経済的および民族的な生活を放棄するかという二者択一に彼らを置いている経済状況のせいではまったくない。オーストリアですます多くの人がチェコ語で話すほど、チェコ人工業の製品にとって消費者への見込みがますます大きくなり、チェコ語学校が増え、チェコ語の処理語や日常語を用いる裁判所や役所が増えるほど、ポストを見つけようとするチェコ人ブルジョアジーの子弟の見込みがますます大きくなる。

それにもかかわらず、ドイツ民族（*deutschnational*）の資本家が、オーストリアのドイツ人労働者を完全に絶滅させ、スラヴ人労働者で置き換えるのに成功するようなことがなければ、ドイツ人層にはチェコ人からの危険は差し迫ったものではない。ドイツ人であることを見せびらかすこと、ここかしこで無力なドイツ人教育団体に施し金を投げることは、ドイツ人労働者が生計を立てることのできる賃金を払うよりも、当然、利潤を減らすことが少ない。その上なお、前者は安い宣伝であるが、後者はそうではない。しかしながら、この政策にもかかわらず、チェコ民族の扶養についてはそれ以上ほとんど考えられることはない。それが急速に広がるとしても、今の生産諸関係のもとで、生産の自立をかなり可能にするほどの広がりのある経済領域を獲得することに成功することは、もうないだろう。資本主義は、チェコ民族よりも急速に発展し、その結果、チェコ民族は経済的に隣人に、とりわけドイツ民族に、ますます依存するようになる。もちろんチェコ語を話す人が増え、チェコ語の学校、裁判所等が増えるほど、チェコ人の産業、知識のあるプロレタリアートにとっての見込みはますますよくなる。だが、ドイツ語の知識がチェコ人のもとで広がるほど、双方の見込みはなおよくなる。従来、チェコ人はドイツ語の習得の必要をそれほど感じていなかった。都市住民の旧世代は、なお十分にドイツ語に熟達しているからである。だが、資本主義の要求を多少とも理解している年配のチェコ人は、この必要性を意識した。彼らはチェコ語の言語領域の拡大に努めたが、チェコ語圏からのドイツ語の駆逐に努めなかった。ドイツ語を知らないことを民族的な美德だとみなしている熱狂的なドイツ語反対者は、農民層と小市民層の代表者である青年チェコ党である。もちろん、チェコ語圏では、ドイツ語の知識は必要ではない。だが、農民層と小市民層は滅亡に瀕していて、彼らが話す言語もそうである。彼らが衰退するほど、資本主義が発展するほど、ボヘミアではチェコ語の意義はますます小さくなり、ドイツ語の意義がますます大きくなる。ボヘミアにおけるドイツ語の前進を阻もうとする試みは、どれも結局この地方の経済的な発展を妨害する結果になるに違いない。チェコ人の民族性の促進はもはや経済的発展の促進をほとんど意味しない（原注4）。

それにもかかわらず、チェコ人は自ら慰めるかもしれない。より大きな民族にも同じ運命が迫っている、と。

大工業の生産力が大きくなるほど、大工業が優勢な生産様式である民族の圏域がますます大きくなる。

今日では、近代の民族の発展の初期におけるように、少数の商業国家が少数の市場で競争しているのではない。近代文明のすべての民族は競技場において、世界のすべての市場を目指して闘っている。その場合、この競争に参加するものには、一つの言語の知識だけでは不十分である。ある者が多くの言語を話すほど、話す言葉の少ない他の競争者をだしぬく見込みはますます大きくなる。近年、ドイツの大工業が世界市場で急速に前進したが、それは少なからず、「民族主義の (national)」側からしばしば中傷されるドイツ人のコスモポリタンな才能のおかげである。ドイツ人商人の下では、全世界が自分たちの言語を話すという伝統の影響が相変わらず生きている英国人やフランス人の下でよりも、豊富な外国語の知識が支配的である。

国際的な交わりが拡大するほど、国際的な交通手段である普遍語 (Universalsprache) への欲求もますます感じられる。そして、ある言語が、恣意的にでなく自然に見出され、価値の疑わしい新しい言語の増大ではなく、世界中をめぐるために、必要とされる言語の減少の欲求が現れる。

ヴォラピュク^(訳注9)は、少数の知識のある者のための秘密言語の地位をほとんど超えないだろう。すでに存在する言語の一つが普遍語になるであろう。

今日すでに、「教養ある者」であるためには、近代の経済的および精神的な生活に完全に参加することのできるためには、母語 (Muttersprache) と別に、少なくとももう一つの第二言語を、世界語 (Weltsprache) を理解し、できれば話せねばならない。この必要はますます大きくなり、世界語と並んで、民族語 (nationale Sprachen) は、今日方言が文章語 (Schriftsprache) に対して占めているのと似た立場に没落するだろう。民族語は、ますます家庭内使用に制限され、そこで信仰篤いが、大きな実用的使用には有用でない古い家具の役割を、ますます引き受ける。ロンドン、ニューヨーク、パリ、ベルリンのような世界交通の巨大な中心で話される言語の知識がますます広まり、これらの中で、またあるものが他を追い越すであろう。どれが勝つか、当然今日ではほとんどいうことができないが、だがいずれにせよ、それに勝利をもたらすのは経済的理由であり、文法的あるいは音楽的な様式を考慮したものではない。

小さな民族では、経済生活だけでなく、文書のおよび学問的生活において、民族語の制限を超えて共通語に達する必要がある、今日すでにますます感じられている。今日、ハンガリー、ボヘミア、スカンジナビア、デンマーク、オランダにおいて、世界の重要な学問的な業績を伝えねばならない者は、たいいてい、母語ではなく、ドイツ語かフランス語の使用を選ぶ。民族的配慮は、しばしばこの行動に阻害的に対抗し、決して発展の利益にならない。

だが、普遍語 (Universalsprache) への欲求は、近代文明の諸民族の単一の経済領域への統一、民族的な制限の除去という欲求の兆候にすぎない。

原生的な共同経済は自足的であった。それはそれが欲するすべてのものを自分で生産した。これは、ある程度、近代の諸民族の場合でも、その存在の初期の実情だった。確かに対外取引はその発展の強力な梃子であったが、その対象は奢侈品であり、原料ではなく、毛皮、装身具、香料等々であった。必要な欲求の満足に関連しては、どの民族も、独立の自己充足的な経済領域をつくった。今日では、それはまったく違ったものになった。今日では、国際的な交易において、奢侈品は生活必需品に対して後退している。国際的な交易が、穀物と家畜、材木と石炭、金属鉱と金属製品等々において、どんなに巨大な部分を引き受けているか、半世紀前にはなお誰も予測することができなかった。今日、近代文明のどの一国でさえ、完全に独立した経済領域を持たない。個々の民族が互いに密接に繋がるほど、経済的な接点、共通の国際的調整を必要とする業務の数がますます多くなる。

60年代の初め、合衆国における奴隷所有者の反乱が起こったとき、北アメリカの綿花の英国への輸送が中断した。英国の綿工業は原料が尽きた。凄まじい恐慌が結果した。今日の近代国家においても、多く

の産業部門が、当時の英国の綿工業と同様に、外国に依存している。外国からの食料品の輸送について、ほとんどの工業国の依存性はそこまで来ている。例えば、世界戦争による国際的な交通の中断は、この状況では、範囲と強度で、1862年の綿花恐慌が兎戯であるような恐慌、工業部門全体の破産を意味する恐慌を引き起こすだけでなく、われわれの世代が見たことのないような飢饉を引き起こすであろう。

近代の諸民族のどれもが経済的に外国に依存するようになる程度に比例して、対外市場に対して内部市場が意義を失う。労働の生産力は今日の大工業では、民族的消費（*der nationale Konsum*）よりもずっと急速に成長する。外部市場の拡大がますます重要になる。

だが、これは労働の生産力の拡大ほどには急速に生じない。われわれは慢性的な国際的過剰生産、経済発展の妨害に直面している。従来促進的であった民族的な諸志向（*die nationalen Bestrebungen*）は、ますますこの点では効果のないものになり、時として阻害的にさえなる。大工業に内外への十分な販路を作るための統一と独立、民族の大きさと強さの賞揚という志向はもはや可能ではない。経済的発展の新しい梃子は、それがさらに生ずるとすれば、生産の国際的な調整が、内外の市場での競争に取って変わらねばならない、ということを顧慮しなければならない。この調整は国際的であるに違いない。何故なら、今日では、近代のある民族の生産様式のどんな決定的な変化も、他の民族にも判然と反作用することのなしには可能でないからであり、大工業は、その生産力の完全な展開のためには、今日のどの民族の枠をも遥かに超えた一つの経済領域を必要とするからである。

だが、この国際的な調整は、個々の民族それぞれの経済生活における巨大な変化なしには、生じ得なかった。民族的な対立は、競争の廃棄、その利潤への刺激の除去なしには、克服できない。

だから、ブルジョアジーは、執拗にこの調節に抵抗するだけでなく、例えば国際的な労働立法など、それを想起させるものすべてに抵抗する。その場合、従来の発展の使い古した梃子をなお一層適合させること以外にない。そして、その苦境が甚だしいほど、それはますます暴力的である。だから、まさに大工業資本家の圏域では、数年来、大工業が民族的な制限を超えて成長し、国際的な経済領域を熱望するほど、因襲的な「民族的」諸志向はますます強力に現れる。今日、過剰生産は非常に大きなものなので、今日では、すべての大工業の生産物を売りさばくことなど考えることさえできない。個々の民族の個々の資本家は、他民族の彼らの競争相手より持続的に安く売ることができる場合に、彼のすべての商品を売ることを望むだけである。だが、この安売りは利潤を危険にさらす。それを守るために、資本家は、民族に、以下のような民族的な連帯（*die nationale Solidarität*）に訴える。労働者、農民と小市民は、あれこれの形で——税金、関税等々——、その財布から、世界市場における種々の「代々の仇敵」の安売りが原因となっている欠損を償うべきだ。これが、ほとんどすべての近代的民族の今日の「民族的な」経済政策の本質的な内容である。それと手に手を取って、通商条約、植民地政策等々によって、民族的な大工業をできる限り助成し、外国の大工業をできる限り害するべきである。

17世紀および18世紀の重商主義政策の古い葉が、おそらくはよりドラスティックな形で、すべて再び出現する。大工業への民族的保護（*nationaler Schutz*）を求める叫びが声高になるほど、外国の競争相手に対する憤激がますます激しくなる。何人かの「愛国者」にとっては、最近の数世紀の貿易戦争の新版は都合の悪いものではないかもしれない。だが、当時の貿易戦争は、勝利した民族に、経済発展の新しい衝撃を与えた。今日では、それは国際的な連帯を要求し、戦争は経済システムの破綻を意味している。

ブルジョアジーの偏狭な階級的利益は、今日では、民族的制限（*nationalen Schranken*）の保存を要求するだけでなく、その強化、民族憎悪（*Nationalhaß*）の先鋭化を要求する。それによって、それは経済的発展の諸条件とますます対立するようになる。

それに対して、経済的発展の諸条件はプロレタリアートの階級的利益と一致する。

ブルジョア的自由のためにと同様、プロレタリアは、反動的、愛国的主義的な諸要素に対向して、その民族の和合と独立に味方せねばならない。それは外部からの万一の攻撃に対するのと同様である。この意味で、それは民族的である。だが、その利益は、他民族の階級的同志の利益と対立するものではない。一民族の資本家は、外国の階級的同志たちができるだけ不利な条件で生産することに利益を持っている。一民族の労働者は、外国の階級的同志たちができるだけよい状態にいることに最大の利益を持っている。ドイツの賃金が高いほど、そこで労働者団体等々が安泰で強力なほど、ドイツ人労働者にとってだけでなく、スイス人、フランス人、英国人等々にとってもますますよい。逆もまたそうである。一国民の労働者の状態がよいほど、彼らは、移住して隣人と競争するのではなく、ますます国内に残り、この民族の資本家は、ダンピングによって、外国での商品価格と賃金を下落させることがますますできなくなる。

近代的生産様式が発展するほど、労働者相互の国際的連帯がますます緊密になるが、同時に同じ民族の労働者と資本家の民族的連帯は小さくなる。

近代の諸民族をつくりだした同じ発展が、近代の階級対立をもつくりだした。プラトンがその時代の自治団体について言ったことが、近代の民族についても妥当する。そのどちらも、二つの敵対的な自治団体（*Gemeinden*）、貧者と富者から成り立っている（^{原注5}）。ローマ世界帝国においては、没落に近づいたころ、社会的対立が非常に大きくなり、それについて語られるとき、ロマンス民族の分解過程は非常に耐え難いものとなり、公敵であるゲルマンの野蛮人が多くの者に救世主であると思われるほどであった。少なくとも民族国家においては、今日なお、そこまでは達していない。そして、われわれも、プロレタリアートの側からそこに到達していないと思える。なるほど、ブルジョアジーとプロレタリアートの対立がますます大きくなるが、同時に知性と精力から見れば、民族の中核であるプロレタリアートはその数をますます増し、プロレタリアートの利益と民族の利益とはますます一致する。だから、民族に敵対的な政策はプロレタリアートの側からの純然たる自殺であろう。プロレタリアはそのようなことを目論むことはない。

むしろ、デルレード（^{訳注10}）、カトコフ（^{訳注11}）あるいはケルニツシェ・ツァイトウングの信奉者および類似の排外的な愛国主義の諸要素が、まさにその「民族的」な政策によって民族の利益に対立するかもしれない。何故なら、彼らはその経済的發展を妨げ、共同作業での他の諸民族との結合を損なうからである。多くの諸国で、「民族的」な圧力が労働者の、それゆえ民族の大部分の高賃金を、「民族的」な不幸として悲しむなら、それは意味のあることではない。

今日、プロレタリアートはすでに様々な民族において、民族的な発展（*nationale Entwicklung*）の担い手である。近代のどの民族においても、彼らは首都あるいは少なくとも大都市から出ている。ほとんどすべての大都市において、プロレタリアートが決定的な優位を占めていることは、誰も否定できない。プロレタリアートが、あれこれの国で民族的な生活に目立った影響力を勝ち取る時代はもう遠くないと、われわれは思っている。そうすれば、今日その愛国主義を見せびらかしている非常に多くの輩の「民族的」な感情が、この状況でも持ちこたえるかどうか、ローマのルンペン・プロレタリアの例、および大革命の時代のフランスの宮廷貴族の例が真似られることがないかどうか、わかるかもしれない。

プロレタリアートの目標はあらゆる階級的差別の廃棄である。その達成は、従来まだ存在したことのないほど、諸民族の統一を堅固なものにするであろう。事情によっては、あらゆる民族同胞の共通の利益が強かったとしても、その効力は階級対立によって弱められていた。それに対して、その廃棄は民族的な団結を達成し、原生的な共産主義的共同社会だけが類似的に示したような連帯を達成するだろう。

だが、原生的な共同社会の隔離は、今日および将来の諸民族にとってもはや可能ではない。彼らはますます緊密に連携して、単一の大きな社会を形成するに違いない。そして、弱い民族の征服および没落によってではなく、この連携がすべてにもたらす利益の至上の力によって、経済的対立、商品貿易および貿易競

争が除去されるやいなや、民族的闘争の下においてではなく、このような総括が生じるであろう。おそらく今日グラウビュンデンのロマンシュ語住民が、痛みなしに不平なく徐々にゲルマン化するように、諸民族は痛みなしに互いに同化するだろう。何故なら、わずかの谷でだけ話されている言語よりも、誰もが広い周囲で誰もが理解する言語を話す方が有利であると、彼らは考えるからである。

われわれは、発展の描写にあまり長く止まることはない。ただ、その終結が将来の世紀に属していることが予測されるだけである。

今世紀の課題は、一方で諸民族を互いに引き裂き、他方で諸民族そのものをますます分裂させる経済的対立を除去することで、国際的だが、同時に統一した民族生活を形成することで、この発展に道を開くことである。

《原注》

- 1 「インドのラージャとアフガンとモンゴルの征服者は、しばしば諸個人に対して残忍で、少なくとも大衆に対する善行、今日なお至る所にある巨人族の作業に匹敵する驚くべき建築物によって統治時代を特徴づけた。……7・8カ月の間曇りなく無慈悲な晴天が続く空のもと、6カ月間土壌が生産を鼓舞しない気候で、河川の周期的氾濫で援助されることのない農耕の唯一の救助策は、巨大な貯水池および、そこから灌漑目的の水を汲み上げることのできる比較的高所の噴水池に貯水槽を見つたり、作ったりすることであった。インドにある記念碑あるいは有用な公共建築物は、すべてその土着の君主に由来している。(東インド)会社は、インド人の従属者の福利のために、井戸を開発せず、貯水槽を掘らず、運河を引かなかった。……新しいものに何も着手することなく、古いものを衰微させる。貯水槽や運河とともに、文化と住民は消滅する。土地は荒野となる。」(E. de Warren, *L'Inde anglaise en 1843*, Paris, 1844)
- 2 すでに見たように、通常、これは個々の人物ではなく、有利な位置にある連合した協同体の所有に帰す。例えばメンフィスはナイルの堤防と貯水池、あるいは他の利点を享受する。そして、関連する自治団体から首都が造られる。
- 3 アイルランドの併合は、1169年に、ヘンリー2世のもとで開始された。だが、アイルランドが完全に征服されるまで、それはほとんど4世紀持続した。
- 4 ドイツ人が、経済領域を開発することでチェコ人に利益を与える見込みなしに、チェコ人にその言語を押し付けた場合よりも、ボヘミアでは、ドイツ語の知識は急速に広がるだろう。
- 5 「というのは、どの国家も、——戯れに言われるように——多数の国家なのであって、一つの国家ではないのだからである。もともと、二つの互いに敵対する国家がそこにある。すなわち、貧乏な人々の国家と金持ちの人々の国家である。」^(訳注12)だから、階級対立で分割されない共産主義的な共同社会は、商品を生産し取引をする軍事的共同社会を凌駕するものであると、プラトンは判断している。

《訳注》

- 1 本稿はKautsky, Karl, *Die moderne Nationalität*, in *Die Neue Zeit*, Jg. 5, S.392-405 u. S. 442-451の翻訳である。この論考についてのわが国の研究としては、上条勇『民族と民族問題の社会思想史：オットー・バウアー民族理論の再評価』(梓出版社, 1994年)第1章「マルクス主義民族理論の先駆者カウツキー」および相田愼一『言語としての民族：カウツキーと民族問題』(御茶の水書房, 2002年)第1章「『言語としての民族』論の形成とその課題」がある。翻訳に当たって参考にした。記して両氏に謝意を表す。
- 2 Hammer, Guido, *Zersetzung der modernen Nationalität*, in *Die Neue Zeit*, Jg. 5, S. 177-184. カウツキーの原文では、“Dr. Lammer”となっているが、*Neue Zeit*の当該論文の著者は“Dr. Guido Hammer”である。
- 3 Arminius (BC. 17-AD. 19): 帝政ローマ初期のゲルマン人ケルススキ族の族長。トイトブルクの森の戦いでローマ軍を打ち破った。ルター以後、ドイツでは「ケルススキ族のヘルマン」と呼ばれることが多い。
- 4 Eichhorn, Johann Gottfried (1752-1827): ドイツの神学者、オリエント学者、歴史家。
- 5 ヘロドトス『歴史』(上)、松平千秋訳、岩波文庫、1971年、221頁を参照。
- 6 『孟子』(上)、小林勝人訳注、岩波文庫、1968年、210頁を参照。
- 7 現在のバイエルン西南部、ヴェルテンベルクの住民を指すが、スイス、東欧では、ドイツ人全体をこのように呼ぶことがあった。
- 8 ゲーテ『ファウスト』相良守峯訳、岩波文庫、1958年、1976-1977行を参照。
- 9 ドイツ人カトリック神父J.M. シュライヤーによって、1879年につくられた人工言語。

- 10 Déroulède, Paul (1846-1914) : フランスの右翼政治家。1882年に愛国者同盟 (*Ligue des patriotes*) を結成。
- 11 Katkov, Mikhail Nikiforovich (1818-1887) : 帝政ロシアの保守派ジャーナリスト。『モスコフスキエ・ヴェドモスチ (Московские ведомости)』の編集責任者。
- 12 プラトン『国家 (上)』藤沢令夫訳, 岩波文庫, 1979年, 268頁を参照。